『英語教育が甦えるとき』を読んで

今井　純子

１　はじめに

山田先生の本を恵那での出版記念懇親会でいただき、そのまま文化祭シーズンに突入して、おとといが文化祭が終わり、やっと昨日読み終わりました。忙しい中での斜め読みなので要点をつかみながら読むことができずにいます。

しかし、文化祭ではおかげさまで学校で一番の赤陵大賞や、ＰＲ大賞、それに続く球技大会ではバレーで女子が優勝するなど、華々しい活躍をすることができました。

記号研では、自分の実践をしながらも、他の先生方との競争?にも勝ち残らなくてはならないので、とてもきつい時があります。寺島先生には、なぜそんなことをやっているのかといつもお叱りを受けますが・・・。目の前の生徒たちとの義理もあり、仕方がないなぁと思いながら、できる限りのことはやっています。

ただ、この本の元になった原稿をこの掲示板でずっと読んでいましたので、懐かしく思い出しながら読み返しました。

２　感想

この本全体を読んでの印象としては、相変わらず隙がないなという感想を持ちました。記号研に入った当初の頃より、大分行間が読めるようになったので、授業でうまく行っている箇所だけではなくて

> **いま、「自由に」題材を選んでいると書きましたが、明らかに「不自由に」選ばされていると感じることを私は経験しています。いまこの状況は改善されて希望者受験に変わりましたが、私の大学では３年前まで２．３年生全員に Toeic を受けさせていたのです。[Toeic Bridg ではないですよみなさん信じられますか。]（『英語教育が甦えるとき』p.162）**

こういった現実もあることとか、何を目的に寺島先生や、山田先生がこの本を書かれているのかを考えると、本当に愛情あふれた本であるということが実感できるのです。その目的とはただ１つ、現場で疲弊している英語教師を元気づけることにあるのではないでしょうか。

また、私は、自分では高校での縛りがあるので、実践があまりできてはいませんが、掲示板で山田先生が発言されることを、授業中に生徒に投げかけたりしています。それだけでも、生徒が授業に興味を持ってくれるようになったり、現実と自分を近づけて考えることのできる良い材料になっています。（教科書で扱うことに、少しずつ自分で調べたことも話してやる、たとえば、水問題の「アクアフィナ」のこと（『〃』p.157）。「愛しています」を過去の文豪がどう表現したかなど。文法の時間では、トトロにでてきた、Thank you.（よろしくお願いします。）が未来の行為に対して使うことができるということなど。（『〃』p.182）本当に私にとっては授業の中で使える宝の山に思えます。

ただ、自分がこういった教材を使えなくて、系統立てて教えられないことが本当に残念でなりません。最近寺島先生や美紀子先生の本を読むのがおっくうになるのは、こういったことが原因です。

けれども、そんな中でどういった教師になるべきかいつも叱咤激励されている気がします。たとえば、

さらに言えば、題材は教科書のものを使わなくてはならない場合でも、その内容を補完する英文を加えてふくらませる、あるいはその内容とは反対の主張をもってきて考えさせるとか、はたまた英文自体の矛盾を見つけるような「読み」を試みるといった教科書の創造的利用をするなど、教科書を使った授業でも俄然おもしろい授業を作り出すことが可能になる。そのような目で教師が新年度から使うことになる教科書を春休み中に読んではどうだろうか。

これは英会話で自分が語れるものをまずつくるとも言えるだろうか。（『〃』p.144）

3　自分の一番印象に残った文

さて、いつもそのように激励されている私ですが、最近は授業も大事ですが、生徒が人生についてどう生きるべきかに悩んでいたり、自分も悩むことが多かったので、実践そのものよりも、山田先生の言葉の端々にすごく感銘を受けました。ふつうの読者だったら、(たとえば茅野先生のように、「内輪だけで通用する本」になっていないかといった疑問を持つのかもしれませんが、私の見るところはいい意味で、大分かけ離れていると思います。)

そうやって気づくことは山のようにあります。ただ、あまりこの文章を長くしたくないので、今の私が必要だと考えているところを書いていくことにします。引用して、どうしてそこが大切だと思ったのかを書いていきます。

「目先ではなく少し先を見ること」については、自分に身近なことほどそれを実践するのは難しいように見えます。例えば、英語教育。もっと難しいのが自分の子どもの教育です。（『〃』p.212）

最近、うちのクラスの悪ガキ代表の安東君が、２学期の中間テストで、６０点という高得点を上げました。彼らは、通常３０点ぎりぎりになるようにしか点数をとらないので、快挙といえるでしょう。しかし、彼は、就職活動をしなければならず、それには赤点を取っていてはいけないと考えたのでしょう。授業を普通に受け、対策プリントを一通りやったら、この点数がとれました。考査が終わって、就職活動できるようになっても、彼は授業態度が悪くなることはありませんでした。なぜなら、自分が勉強すれば、いい点が取れて、無駄に１を取るのは損だと気づいたからです。私は、いつになく真面目に授業を受けるようになった彼に、「ちょっと先の見通しがあると、全然結果は違ってくるんだよな。」とつい言ってしまいましたが、彼にとっては蛇足だったかもしれません。

このように、とても悪いと言われる生徒でも、ちょっと先の見通しを持たせることや、自分で持つように生活を計画させることがすごく大切だと分かりました。だって、彼は悪知恵にかけては天下一品と思われるくらい頭が回るのですから。悪いと言われる行動にな

る前に色々と状況を見て、準備させることが大切だと分かりました。

こういった意味で、この山田先生の言葉は、今の自分と生徒の関係にぴったりで、かつ、自分に身近に思えるところ、例えば「自分の子どもの教育」とありますが、その意味がとても重く、親として格好をつけたいところがあるのは当たり前ですが、我慢して、勉強させたり、親も、我慢をしていかなければならないということではないのかと思いました。そして、見通しに基づいて、やるべきことを粛々とやっていくことは、社会の平和や、子ども自身の幸せを守る上で本当に大切で必要なことではないかと考えました。

阿部先生の思い出にはこんなこともあります。「私にはとてもそんな指導はできません」と言われたことです。その頃話題になっていた『はばたけ青春貴族』という本の・・・(中略)そこには教師が生徒を説得する際にそばの椅子を蹴っ飛ばして迫ったと書かれていましたが、そのことを指して阿部先生は先述のように言われたのでした。

このことは、荒れた本校でも顕著に表れる事象です。例えば、女である私がたとえ声を荒げて生徒に言ったとしても、どこふく風とでも言うように生徒には受け取られますし、女性の先生が偉そうにすることを生徒は本能的に嫌います。ですから、私たちはまるで学校で透明人間のように扱われるなと感じることがあります。

しかし、生徒からよく聞くのは、「あの男の〇〇先生は怒って怒鳴ればすむと思っている。」というつぶやきです。私は、これを聞くと少しほっとします。一応生徒も男の先生に従いながらも、そのしかり方が正当かどうか探るようになってきたということが分かるからです。

男の先生方には気の毒ですが、女性の先生方は、男の先生方のたぶん数１０倍は怒っていると思うので、我慢していただきたいな、また、それを察していただきたいなと思ってしまいます。決して、自分だけ仕事していると自負していただくことのないようにしていただきたいものです。

そういえば、先日、４組(選抜クラス)の生徒が、塾の話をしていて、彼らは塾で先生と目を合わせるのも怖いくらいの授業を受けてきたと言っていました。例えば宿題ができていないとどうしてそういうことになったのか、クラスの前でつるし上げになるそうなのです。塾の先生から見れば、高いお金を払ってきているのに、生徒の成績を上げさせられない責任を問われるのが怖いので、そうなることはあり得ます。小学校・中学校の先生方がそういうことをするのではなく、今は塾がそういったつるし上げという戦術を使っているのだなということが良くわかりました。ですから、生徒たちは心底勉強嫌い・または、主導権を取ろうとする先生嫌いになって高校にやってくるのです。私は「そんなことして、まぁ基礎が分かって面白さが分かるならいいけど、結局本当の意味で勉強の楽しさがわからなければ意味ないやん。」と彼らに言ってやりました。生徒たちは、納得した表情を浮かべていました。この生徒たちは３年間事細かく面倒をみた生徒たちで、初めて、こういった事情を話してくれました。だから、付き合いが１年程度では、こういった本音も聞けないのではないでしょうか。そうして、先生たちはこういった事情も知らずに生徒に勉強を強制していくのだなとそら恐ろしい気持ちがしました。つまり、彼らはそこで自分の大切な友達や、これから友達になろうという人の信用を全て失ってきたのですから、その恨

みは骨髄のものとなるでしょうから。